

特集 ■ 脳外傷などによる高次脳機能障害の課題

「高次脳機能障害支援モデル事業」は 2005 年度に終了し、高次脳機能障害者に必要な支援体制の構築は障害者自立支援法のもとで各行政単位に委ねられることになった。本特集では、診断や治療、障害像、地域支援など、モデル事業を契機として認識が進んだ部分、課題として残された部分、今後優先的に手をつけるべきこと、などを明らかにする。

■「高次脳機能障害支援モデル事業」の成果と今後の課題（蜂須賀研二氏，851 頁）

論文の前半で、高次脳機能障害支援モデル事業の概要と成果が解説される。モデル事業を契機としてリハビリテーション医療において高次脳機能障害への関心が飛躍的に高まった。その傍証としてモデル事業期間中の日本リハビリテーション医学会における関連発表がそれ以前と比較して 9 倍に増加したことを示している。後半では、福岡県における支援体制構築の取り組みが紹介され、モデル事業後の支援の基盤づくりが完了していることを述べている。

■障害の特徴（角田 亘氏ら，859 頁）

原因疾患の違いによる病態・画像所見・症状などをまとめ、脳外傷などの広範な脳損傷による高次脳機能障害を前頭葉機能障害として説明している。これを米国 Rusk 研究所の通院プログラムで使用している神経心理ピラミッドを引用して解説している。

■診断方法の進歩と課題（丸石正治氏，865 頁）

診断に有用な最近の脳画像検査法を紹介しているが、その前段では、認知機能には、作動記憶に代表される実行系認知と、アスペルガー症候群などでも低下が指摘されている社会性認知があることを述べている。症例の呈示では、実行系認知は保たれているが社会性認知が低下している 1 例で、脳梁と帯状回の萎縮があったとしている。

■治療と訓練（伊藤武哉氏ら，871 頁）

医療環境のなかで行いうる治療法を幅広く展望している。すなわち認知リハビリテーション、薬物療法、神経再生、器機の利用についての解説である。認知リハビリテーションにおいては、記憶、注意、遂行機能などの評価法と訓練法がまとめられ、エビデンスに基づいて実施が勧められる方法が示されている。再生医学については、実用化された段階で機能再生のためのリハビリテーションが必要になると予測している。

■地域生活支援の現状と課題（生方克之氏ら，881 頁）

本人と家族の願いは、家族の状況に依らず、本人が地域で安定して生活が続けられることである。このためには、医療の段階から地域生活を維持する段階までのライフステージに沿って、適切な支援が提供されなければならない。高次脳機能障害支援普及事業のなかで、支援コーディネーターを拠点に置くという施策が示された。一方、生活する地域での支援が適切に行われるためには、地域に高次脳機能障害者を支援できる人材が育ち、相互にノウハウを提供し合う環境が整うことが必要である。